

# Citrina 通信

キトリナつうしん  
No. 884



## グランドオープンに向けてラストスパート Final push towards the Grand Opening

11月2日のグランドオープンまで残すところ2週間となった10月18、19日に、関係者は現地に赴き、最後の追い込み作業を行った■土蔵昆虫館入口の重い引き戸は開館中は開けておき、その代わりに軽い引き戸を新設した(写真1)。これで夏や冬の開館時の開け閉めが容易にできる■母屋の新部さんのヘルマンヘッセ展のための展示台5台がカナザワ建具より納品されてきて(写真2)、展示資材一式も数日前に展示が終わった北海道の帯広から搬送されてきた(写真4)■国道からの導入看板、ノボリ旗や土蔵白壁の切り文字等の最終打合せをして、

何とか間に合うことになった(写真3)■土蔵内の世界のアゲハチョウ図説展の標本箱を並べ、解説パネルの掲示が終わった(写真5)■寄付者看板の設置場所を検討した(写真6)■中江コレクションから標本を選び抜いて、美麗アゲハチョウの箱を用意した(写真7)■売店の商品を昆虫文献六本脚より書籍類や虫関連の商品を納入、陳列してもらった(写真8)。いっぺんにミュージアムショップの雰囲気になった■東北インセクトフォーラム岩手大会の帰路に、寒澤、朝日、前田の3氏が来館してくれ、うれしいサプライズだった。六本脚の枝、小林両氏と一緒に(写真9)。



■皆様から寄せられた支援金のお陰をもって、かつ地元建設業者の皆さんの採算を度外視した協力で、何とか昆虫館が整って、グランドオープンを迎えられる目途がたち、関係者一同安堵している。

■土蔵は改修工事前の閉め切った状態だととても良い安定した温湿度環境だったのが、昆虫館として改修工事に入り一般開放した結果、かなりの湿度の影響を受

ける状態となった。湿気対策のために標本収納ダンス、間仕切り扉や除湿器を設置したので、今後は以前のように安定した環境に近づくと考える。特に湿度の安定は標本保管施設としては最重要課題と考えている。土蔵内各所に設置したデータロガー記録で、その対策の効果についても、検証してゆきたいと考えている。

(寺章夫/2025年10月22日)



## グランドオープンを迎えて Celebrating the Grand Opening

**か**ねてから準備を進めていた虫の里昆虫館のグランドオープンの祝賀式典が晴天のもと福島県矢祭町小田川の旧佐川邸で 2025年11月2日(日)に執り行われた。当日は、矢祭町長はじめ町の要職の方々や地元の名士の方々のご臨席のもと、館側からは奥本大三郎名誉館長をはじめ関係者がお迎えした。また今回は虫の関係者として、伊藤建夫(信州大学名誉教授)、白石雄治(白石環境株式会社会長)、渡辺隆(G 多摩虫企画幹事)、保坂満(日本鱗翅学会東北支部事務局長)、町島佳幸(タカオゼミナール会員)、安藤俊之(G ひぐらし会員)の諸氏の他多数の方々に参加していただいた(写真 1)。

■国道からの導入看板(写真 2)と駐車場のノリ旗(写真 3)は何とかグランドオープンに間に合った。導入看板

は古民家を意識して江戸時代の旅籠の雰囲気ですりデザインしたところ、映画のセットのようで少々反省したが、意外と評判が良くこそばゆい。

■敷地内は夏草や春に剪定した庭木も生い茂っていたが、片野恵仁さん他石井さん兄弟の手できれいに整備されて、皆さんをお迎えできる姿になった。

■今回の目玉の新品さんの「ヘルマンヘッセ展」は 2 週間前に展示作業を予定していたところ展示台の手直しで、前日だけの作業になった。展示が終わっていき点灯してみると充電式の LED 照明が光量不足で使い物にならないことがわかり、急遽工事用の投光器でなんとかカバーした。いままで様々な場所で展示を行ってきた百戦錬磨の新品さん、そのようなトラブルなどには全く動じることなく、結果的に長さ 9m×2列の展示スペースを目一杯に使って立派な展示を設えていただけた(写真 4)。



■当日の式典は予定通り 11 時から始まり、一般社団法人ニワトコ代表理事矢崎潤子氏の開会の挨拶(写真 5)、

矢祭町町長佐川正一郎氏の来賓祝辞(写真 6)、昆虫館副館長寺の開館の挨拶に続いて、メインイベントの土

蔵白壁の館名表示の除幕式を執り行った(写真 7)。

■館名表示は奥本名誉館長の揮毫により、そして同氏の手で描かれたカブトムシとアゲハチョウの画を添えて、当昆虫館にふさわしい親しみと品格のある看板となった。除幕の後、奥本氏から「蟲」の字についての解説があり、参加者一同、頷いておられた(写真 8)。

■式の後、古民家母屋の入り口ホールに場を移し、奥本氏のお話をお聴きした(写真 9)。白板にハチの体の側面図をすらすらと描き(写真 10)、胸部と腹部のくびれの説明には、西洋の 18 世紀の女性のコレットの話をつなぎ、その幅広い博識に皆さん聴き入っていた。

■その後、この 9 月末に発刊したばかりの奥本氏著の「昆虫学事始」と、2018 年発刊の「虫と本は家の邪魔」のサイン会を開き、和やかな雰囲気サインしていただいた(写真 11)。

■また、売店では昆虫文献六本脚の川井信矢社長にも手伝っていただき、世界アゲハチョウ図説関連のポスター他、採集用具、書籍他を販売した(写真 12)。当館の

ミュージアムショップの初日として上々のスタートとなった。

■式典が丁度お昼をはさんでいたので、埴町の郡司徳典さんご夫妻のキッチンカーを派遣していただき、地元産野菜を使った焼きそばを作ってもらった。皆さん楽しく食べていただきお祭り気分を盛り上げた(写真 13)。

■母屋では赤じゅうたんの元、今回の特別展示の新部公亮氏による「ヘルマンヘッセ展」が大々的に行われ(写真 14)、土蔵内では「世界のアゲハチョウ展」で中江信氏が著した図説の展示を行った(写真 15)。

■「世界のアゲハチョウ展」は、本来だとこの昆虫館の起案者の中江氏がこのグランドオープンの主役なのに、体調が優れず出られなかったもので、せめて展示だけでもと、寺が企画したものだ。図説の原寸レプリカの上に実物の標本を刺して「立体図説」と言うアイデアは本邦初だと思う(タイトル脇)。虫屋の評価は良く、満足している。

■昆虫切手研究会の森晋一郎氏の切手展示も今回のために更新した(写真 16)。昆虫標本だけでなく、切手と言うテーマで間口を広げたことは良かったと思う。



■構想が持ち上がって1年半で、このように立派な昆虫館が出来上がり、考えてみると夢の様だ。たくさんの方々のご支援に改めて感謝したい。その気持ちの一端を表すものとして、「寄付者看板」を用意し、木札にご支援していただいた方々のお名前を彫って掲げることとした。この看板は寺が感謝の気持ちを込めて手作りし、地元看板会社の増子社長に文字を彫ってもらったもので、名札がますます増えることを期待している。



■今後は昆虫館の企画展示を定期的に更新し、採集会や標本教室など地元小中学校と連携して、この昆虫館を大いに活用してもらえればと考えている。また母屋は民泊や多目的貸しスペースとして、昆虫同好会の採集合宿や複数のご家族の宿泊施設として使っていただけることを期待している。

■幸いにして標本だけでなく昆虫関係の専門書が多数寄贈されてきている。そこで、小さい方の土蔵は昆虫関係図書の書庫兼閲覧室として活用したいと考えている。町立「矢祭もったいない図書館」が全国的に立派に機能しているので、その昆虫部門の分館として活用してもらえればと考えている。

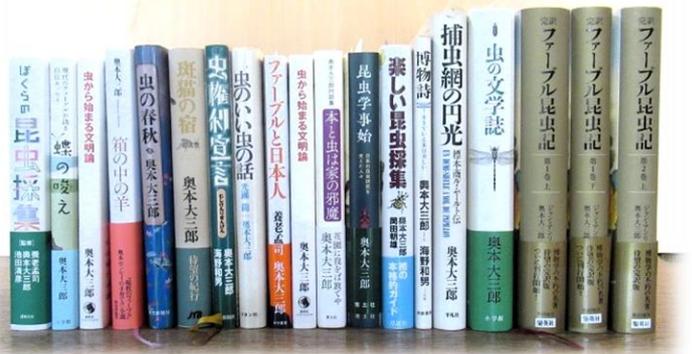
■式典の後、伊藤建夫氏、福田晴男氏、渡辺隆氏と寺の4人で「矢祭もったいない図書館」を訪問して、緑川宏子館長に館内を案内していただいた。閉架式の書庫に

は見馴れた保育社の昆虫図鑑や奥本先生訳のフェアブル昆虫記全巻他が多数蔵書されているものの、これからさらに書籍を寄贈して充実できる余地があることがわかった。



左から、緑川館長、福田、伊藤、渡辺各氏

■奥本先生の著書や翻訳本がたくさんあるので、「奥本文庫」も考えている。書いた本を積み上げて肩の高さまでになるとお迎えが来ると先生はおっしゃるが、お聞きすると並べて2間幅はあるとのこと。先生はもう2回以上お迎えが来たことになる。ますますお元気でご活躍され、末永く当館の名誉館長をつとめていただきたいと思っている。



(寺章夫／2025年11月4日)

タイトル画像:「世界のアゲハチョウ展」用に作った「立体図説」